

【優秀賞】

おじいちゃん

小林 由佳（兵庫県 兵庫県立須磨友が丘高等学校 2年生）

「おばあちゃんへ」

夏休みに入って、一週間が経ちました。毎日暑いですが、おばあちゃんは変わらず元気ですか？お盆くらいにそっちへ行こうと思います。久々に会えるのを楽しみにしています。」

そんなはがきを祖母に出して数週間、私は神戸から父と母と三人で都会から離れた祖母の家へやってきた。電車で片道二時間かかる祖母の家は緑で囲まれていて人も少ないためか都会と違って静かだった。

「長旅お疲れさま。久しぶりやねえ、大きくなって。」

祖母はいつものように私の頭をなで、微笑みながら迎えてくれた。

「今日は疲れたでしょ。ご飯、できてるわよ」

そう言いながら家に入れてくれた。

「この辺、家が減ったなあ。前はもつとにぎやかだったのに。」

父が持ってきた荷物を家に入れながらぼそつと言った。

「そうねえ。寂しくなったわ。」

祖母は少し寂しそうに笑った。確かに言われてみると前に来た時よりも家が減った気がする。

祖母の住んでいる町は小さいからというのもあってか住民同士の仲が良く、夏祭が毎年にぎやかだった。私も亡くなった祖父とよくその夏祭りに行った記憶がある。ちょうど今くらいの時期だったなと物思いにふけた。食事が終わり、自室でうとうとしっていると、いつのまにか寝てしまっていた。

辺りを見渡すいつも小さい頃よく来た夏祭りの夜と同じ雰囲気だった。中央でやっている盆踊りのどんちゃんらどんちゃんらにぎやかな音やいろんな屋台の店主が客引きをしている声などが聞こえる。お祭り広場周辺についているまばらな明かり。

お祭りを見ながらうろろしているとき見覚えのある顔を見て足が止まった。白とねずみ色の混じった髪色に、機嫌が悪いとよく勘違いされる「へ」の字口。間違いない、祖父だった。

祖父は私に気が付くところこり微笑んで近づいてきた。私を迎えてくれる時のいつもの笑顔だった。懐かしい表情を見て私は涙がこぼれそうだったが、それをどうにかこらえ、私も微笑み返した。

その後祖父と一緒に昔のように夏祭りを楽しんだ。たくさんのお面が売られている。焼きそばやお好み焼きやカステラの屋台が並んでいる。金魚すくいには子ども達が群がっている。

そして祖父は私の話も聞いてくれた。高校に入ってすぐの頃はなかなか友達ができなくて学校が嫌だったこと、今では仲のいい友達が増えて毎日が楽しいこと、たくさん話をした。祖父は私の話に黙ってうなずくだけだったが、楽しそうに話を聞いてくれた。そうして話しているうちにいろんなことを思い出した。

私が小学校に入学する前、ランドセルの色を決める時に女の子なんだからと赤だという祖父と最近はいろんな色があるんだからという祖母がもめ始めた。

祖母と川遊びに行つて私のはいているサンダルが流されてしまった。びしょ濡れになりながら祖父が川に入つて拾つてくれた。

毎年誕生日が近くなると「ほしいものはないか。」と広告を指さしながら聞き、クリスマスが近くなると「今年はサンタさん、なにもつてきてくれるかなあ。靴下とクッキー、ツリーの下に置いとかなとなあ。」と嬉しそうに笑っていた。

祖父は読書が好きでよく晩ご飯前に本を読んでいた。祖母の「ご飯ができたよ。」という声が聞こえないほど集中していて、祖母によく「ご飯が冷める。」と怒られていた。

祖母にこんなに大事にされていたんだなとうれしい気持ちになつていた。

お祭りをしばらくまわると、突然まわりの景色が煙のようにゆらゆらばやけ始めた。また祖父の横顔を見ると泣いてしまいそうだった。しかし祖父がいつもしてくれるみたいに微笑み返した。

気が付くと自分の部屋だった。さっそく寝床を飛び出して夢の出来事を両親と祖母に話した。両親には「よっぽどおじいちゃんが好きだったんだな。」と笑われた。祖母はよほど懐かしかったのか、私の話一つひとつにうなずきながら聞いてくれた。

私はそれから毎年お盆の時期になるとその夢を思い出す。ただの夢のはずなのになぜかずつと覚えていく。

今年もあの時の夢を思い出しながら、祖母の家で「おじいちゃん」とともに過ごしている。